

2018 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

## 人々のためのエンジニアリング

（原文は英語）

ケント・ハリー・ペレス・クンピオ（22 歳）

フィリピン・レイテ島

フィリピン大学

私の国では皆、私が国を出ていくことを望んでいます。私の両親や友だち、親戚は皆、同じことを言います。「卒業したらフィリピンを出て、海外で賃金の高い仕事に就きなさい。才能を無駄にしてはダメだ。この国にはチャンスはない」。そして、フィリピンの若者は皆、次のアドバイスを聞いたことがあります。「マニラで一番の大学に入れるよう一生懸命勉強すれば、この国から出ていきやすくなる」。

私も貧乏だったため、このアドバイスを重く受け止めていました。両親が肉を買うお金がないために、お昼にお米しか食べられない気持ちを私は知っています。学校のクリスマスパーティーで他のクラスメイトは新しい服を着ているのに、自分だけ着古したシャツを着て出なくてはいけない時の気持ちも知っています。幼い頃、私は、より良い生活に対する根深い願望を持っていたため、先生が一生懸命勉強して、試験でいい成績を取れば、いつか裕福になれると教えてくれた時、私は彼女の言葉を信じました。

それ以来、私は勉強に情熱を注ぐようになりました。小学校では卒業生総代になり、たくさんの賞も受賞しました。その後、卒業生の多くがフィリピンのトップクラスの大学に進学することで有名な、国内最高レベルの科学高等学校に入学することができました。私は自分の目標に近づくことができたという誇らしさでいっぱいでした。何のためにこれらのことをしているか、つまり、この国を出てより良い生活をするために勉強しているということを毎日、自分に言い聞かせました。

しかし、大学で自分の人生の選択を考え直すことになります。そこで、自分の考えが試されるような様々な考え方に直面しました。社会科学の教授が言ったことがずっと忘れられません。「ここで学んだ人たちがこの国を支えていくことを目的に、この大学は公的資金を受けています。しかし、多くの卒業生は卒業証書を受け取った瞬間にこのことを忘れてしまいます。この国の貧しい人々を救うのではなく、高給を得るために外国に出て働くのです。彼らは、私腹を肥やすために自分の知識を使っています。そして、フィリピンに戻ってくると、この国がまだ貧しいことにすぐ文句をつけるのです！ でも考えてみてください。あなたはこの国を助けるために何をしましたか？ あなたたち全員がこの国が



ら出て行ったら、誰がこの国の貧しい人々を助けるのですか？」

この時が私の人生の転機でした。教育にはもっと重要な目的があることに気づいたのです。教科書に載っている問題の解き方を学ぶことや試験でいい成績を取ることが教育の目的ではありません。その目的は、物質的な富で私腹を肥やすことではなく、そもそもなぜ物質的な富に執着しているのかということをも自分たちに問うことなのです。私たちはより大きな視野で物事をとらえ、厳しい問題と向き合えるようにならなくてははいけません。社会における私たちの役割は何なのでしょう。そして、私たちの知識をどのように役立てることができるのでしょうか？

自分の工学知識をこの国の貧しい人々を助けることに役立てたいと思い、私は「Engineers Without Borders - Diliman (国境なき技師団ディリマン)」の創設メンバーの一人になりました。これは大学構内に設立された、初めての人道主義に基づくエンジニアの組織になります。エンジニアの仕事とは大きな工場で働くことだけではなく、農村部に浄水施設を設置したり、汚染された川をきれいにするためのより優れた道具を設計したりと、様々な側面があることを人々に分かってもらいたいと思っています。私が担当していたのは、生ゴミを料理や暖房に使えるガスへと変換させる小さなバイオダイジェスターを作るプロジェクトでした。人々の生活を変えるためには複雑な概念は必要ないということを実証したかったのです。シンプルな科学概念を適用するだけでも大きな影響を与えることができるのです。

今はもう国を出たいとは思いません。卒業したら、バイオダイジェスター製作に関する専門知識に磨きをかけ、この技術がどのように機能するかを地域の人々に伝えていきたいと思っています。また、すぐに国家バイオダイジェスタープログラムができるよう、自分の文章力を生かして、元老院議員の一人に立法案を提出したいとも思っています。このプロジェクトは農家や一般家庭の経費節約に役立ちます。高価なガスを購入する代わりに、生ゴミや動物の排せつ物を使って、家庭で自分たちが使う燃料を作ることができるのです。

私の市民活動を通して、私と同じ若い人たちをこの国に残るよう説得し、人生には金銭を追い求めるよりも大切なことがあるということをお伝えたいと思っています。私たちには奉仕すべき人々や造らなければならない国があるのです。そして、自分たちに問うべきなのです。私たちがいなくなったら誰がこの国の貧しい人々を助けるのかと。